言語研究（*Gengo Kenkyu*）**165**: 1–32（2024）　doi: 10.11435/gengo.165.0_1

出雲仁多方言における母音をめぐる音変化

平　子　達　也

南山大学

【要旨】島根県出雲地域で話される出雲仁多方言における母音をめぐる音変化を，古代語との比較にもとづいて，相対年代とともに推定した。仁多方言では，中舌母音化 *u, *i > ɨ と母音の低下 *u > o, *i > e に加え，r の隠在化と呼ばれる変化が起こった。現代仁多方言の形式のほとんどが，古代語の形式を祖形とし，その祖形が上述の変化を経て成立したものと考えられる。一方，古代語との音対応からは例外的と思われる kusoo「薬」, sɨrosɨ「印」, soso「裾」という 3 形式は，先行研究の成果に照らすと，祖語の *o を保持した形式である蓋然性が高いことが明らかになる。このことは，服部（1978–79 [2018]）が中央方言で起こったとした狭母音化 *o > u という変化を，仁多方言が経験していないことを示唆する。他の本土諸方言においても，中央方言で狭母音化によって失われた祖語 *o や *e が保持されている可能性があり，それらについて比較言語学的観点から再検討していくことがこの分野の今後の課題である[†]。

キーワード：出雲仁多方言，狭母音化，母音の低下，比較言語学，日本祖語

1. はじめに

琉球列島で話される諸言語･諸方言を含む日本語の諸変種（以下，日本語諸方言）を対象とした歴史比較言語学的研究は，その画期となった服部四郎の一連の研究（服部 1976ab; 1978–79 など）以来，琉球諸方言と上代語を中心とする中央方言（奈良・京都を中心とする畿内の方言）[1] との比較を中心に進んできた。近年，琉球諸方言の記述研究の進展に伴い，この分野の研究も急速に深化してきているが，中央方言以

[†] 本研究の着想に至った背景には，上野善道先生が編集された『日本祖語の再建』（服部 2018）の編集のお手伝いをさせていただいたことがある。また，服部旦先生には，服部四郎の研究における出雲方言の位置づけなどについてご教示をいただいた。お二人の先生に心から感謝申し上げる。本稿の内容は，日本言語学会第 157 回大会（2018 年 11 月 17 日，京都大学）で，筆者が「出雲仁多方言の母音をめぐる音変化について」と題して発表したものがもとになっている。また，本稿の内容の一部は，第 114 回九州大学言語学研究会（2019 年 8 月 8 日）・京都大学言語学懇話会第 111 回例会（同年 12 月 21 日）・国立国語研究所シンポジウム「日琉諸方言系統論の展望」（2020 年 12 月 19 日）においても発表した。それぞれの場でコメントをくださった皆様に感謝申し上げる。特に，五十嵐陽介氏からのコメントは「r の隠在化に伴う特殊音韻変化の過程」（3.4.1）について考えるのに有益であった。記して感謝申し上げる。さらに，査読者の先生方には，大変貴重なご意見とご指摘をいただいた。心から感謝を申し上げる。当然ながら，本稿に残る不備は全て筆者の責任による。なお，本研究は JSPS 科研費 15H06596，17K13465，17H02332，21K12990 の助成を得て行われた。

[1] 本稿では「中央方言」を，時代的な区別なしに「奈良・京都を中心とする畿内の方言」とい

外の現代本土諸方言からの貢献は，一部のアクセント研究を除いてはほとんど見られない。その背景には「中央方言が四周の方言を同化した勢力は，奈良時代以前から強力で」「現在では，本土全域をほとんど覆いつくしたと言ってよい状態」（服部 1978–79 [2018: 336]）とする考えがあると思われる。

一方で，服部（1976ab; 1978–79 など）は，琉球諸方言と中央方言（特に上代語）との比較から日本語諸方言の共通祖語（日本祖語）の母音体系を再建する一連の試みを示す中で，本土方言の中に，中央方言が失った日本祖語の形質を継承する方言があることを示唆している。服部（1976a [2018: 63]; 1978–79 [2018: 335]）は，中央方言において日本祖語の *e や *o がそれぞれ i，u に変化する**狭母音化**が起こったとした上で[2]，「水」の日本祖語形に関して，「隠岐，島根，鳥取などに mezu，mezi，青森に medzu，津軽に menzi があるから，日本祖語形としては *mendu（中略）を立て，日本祖語から奈良朝中央方言へ *e → i という変化が起こったけれども，周辺諸方言ではそういう変化が少なくとも一次的には起こらなかったとすべきことが明らかとなる」（服部 1976b [2018: 84]，一部改変）と述べている。つまり，服部は，中央方言の i に周辺方言で e が対応するものを，当該の周辺方言で「狭母音化が起こらなかったと考えられる痕跡」（同）と見做しているのである。しかし，実際は，それら周辺方言の内部で *i > e という変化が当該の語に起こらなかったということが確認されない限り，当該形式を「狭母音化が起こらなかったと考えられる痕跡」とすることはできない。後述するように，島根県の出雲方言では *i > e という「**母音の低下**」と呼ぶべき変化が起こったと考えられる。つまり，服部が指摘した「島根」の mezu，mezi の母音 e も，日本祖語の *e を保持するものではなく，**狭母音化** *e > *i によって一度 *i になった後に，方言内部で起こった**母音の低下** *i > e によって新たに生じたものだとも考えられるのである。

ただ，より大きな問題は，上述のような比較言語学的観点から，本土方言の音韻体系を再検討し，その先史における音変化を推定する試みが十分に行われてこなかった点にある。比較言語学的観点からの検討の結果，ある方言に見られる母音 e，o の一部が方言内部の変化によって生じたものでないことが明らかになれば，それらは当該方言において「狭母音化が起こらなかったと考えられる痕跡」として認められる。実際，本稿で扱う島根県出雲地域諸方言の 1 つである出雲仁多（にた）方言（以下，

う意味で用いる。これに対して上代語は，奈良時代中央方言のことを意味し，8 世紀を中心とする時代に用いられたもので，具体的には『古事記』『日本書紀』『万葉集』（東歌・防人歌を除く）等に反映されたものを言う。仁多方言と中央方言とを比較する場合には，基本的に上代語辞典編集委員会（編）（1967）にある上代語のデータを用いるが，上代語に同源語を見出し得ない場合，『日本国語大辞典　第二版』にある平安時代以降の語形を用いる。本稿では，上代語と平安時代以降の中央方言とを区別せず「古代語」と称する。上代語と平安時代以降の中央方言とを分ける音韻特徴である上代特殊仮名遣いの甲乙の対立が，仁多方言に保持されているとする証拠は現在のところ得られていない。上代語と平安時代以降の中央方言とを区別せずとも，議論に影響はない。

[2] 再建された形式や分節音には * を付す。一方，予測されるが，実際には観察されないものには † を付す。

仁多方言）[3] の母音 o の一部に，中央方言の u に対応しながらも，方言内部の変化によって生じたとは考えられないものが存在している。先行研究の成果などと照らし合わせると，それらは祖語の *o を保持したものである蓋然性が高い。つまり，仁多方言においては**狭母音化** *o > u が起こらなかったことが示唆されるのである。

本稿では，比較言語学的観点から仁多方言における母音をめぐる音変化を推定し，それに関連する諸問題について論じる。まず 2 節で，仁多方言の共時的な音素体系と各音素の分布について略述する。3 節が本稿の本論に当たる部分で，古代語と仁多方言との音対応から，仁多方言における母音をめぐる音変化を推定し，基本的には古代語の形式を祖形とすれば 3 節で推定する音変化の結果として現代仁多方言の形式が得られることを示す。しかし，仁多方言には，kusoo「薬」という形式をはじめ，古代語と仁多方言との音対応からすれば例外的で，また，古代語の形式を祖形と考えると，そこからの音変化の結果として現代仁多方言の形式に至るとは考えられない形式がいくつかある。4 節では，そうした例外的な形式の歴史的位置づけに関する説明を試み，仁多方言が，中央方言で起こったとされる狭母音化のうち *o > u という変化を経験しなかったことを示す。一方で，今手元にあるデータからは，中央方言で起こったとされるもう一つの狭母音化 *e > i について，それが仁多方言で起こったか否か決定づける証拠を得られない。実は，祖語の *e や *o を保持するとされてきた方言であっても，その e や o の一部について，方言内部の変化によって生じた可能性を排除できない場合がある。5 節では本稿のまとめとして，そうした従来十分に検討されてこなかった問題を指摘し，今後の日本語諸方言を対象とした歴史比較言語学的研究の課題を提示する。

2. 出雲仁多方言の共時音韻論：特に母音の分布について [4]

仁多方言の音素目録と各音素の音声的実現を（1）に示す。本稿の主たる対象である母音音素については，国広（1963: 33）の出雲市方言のそれに関する解釈と同じく，/i, u, e, o, a/ の 5 つの音素を認める [5]。

---

[3] 本稿が対象とする仁多方言とは，島根県東部の出雲地域南部に位置する仁多郡奥出雲町の旧仁多町域で話される方言のことを言う。奥出雲町は，旧仁多町と旧横田町とが 2005 年に新設合併してできた町である。本稿で扱うデータは，旧仁多町佐白（現奥出雲町佐白）にお住まいの，宇田川久枝氏（1926 年生，女性）にご協力いただいて筆者が行った調査で得られたものである。宇田川氏はそのご両親・配偶者ともに仁多町佐白のご出身である。調査は，2012 年 3 月以降 2021 年 10 月まで断続的に行なわれた（2020 年 1 月以降はオンラインおよび電話での調査）。なお，本稿で述べる仁多方言の音声・音韻的特徴は，他の旧仁多町域の方言でも同様であり，宇田川氏個人に限った特徴ではないことを確認している。

[4] 本稿で扱う仁多方言を含めた出雲方言の音韻論に関する先行研究としては，出雲市方言を対象とした国広（1963）がある。国広（1963）は，出雲市方言の音素体系を提示するとともに，出雲市方言と共通語との音節対応も示している。

[5] 2 節では，方言形（語形）は音素表記し，斜体で示す。

(1)　仁多方言の音素目録

a.　母音音素 /i[i ~ ɨ], u[ɯ], e[e ~ e̞], o[o ~ o̞], a[a]/

b.　子音音素 /p, b; t, d; c[ts ~ tɕ], z[dz ~ dʑ]; s[s ~ ɕ]; k, g; h[h ~ ɸ]; m, n; r[ɾ ~ ɽ ~ l̠]; w, j/

表 1 は，撥音と促音を除くモーラ一覧である [6]。なお，長母音は母音音素が 2 つ並んだものと解釈する。

仁多方言の共時音韻論において，特に注意すべきは母音の分布である。表 1 から分かるとおり，5 つの母音音素のうち，非狭母音の /e, o, a/ は子音との組み合わせや分布にほぼ制限がない一方で，狭母音 /i, u/ はそれらと子音の組み合わせや分布にかなりの制限がある。

まず，仁多方言を含めた出雲方言一般の特徴として知られているように（友定 2008 など），歯茎の破擦音 /c, z/ と摩擦音 /s/ の後で，狭母音音素 /i/ と /u/ とが中和する。中和の結果，仁多方言では /i/ と /u/ の両者ともが**中舌母音** [ɨ] で現れる。ここでは，このような中舌母音で現れるものを全て音素 /i/ と解釈する（国広 1963: 19–20 も参照）。

[6] 促音・撥音についてはそれらを特に音素としては設定せず，促音は後続子音と同じ子音として，撥音は /n/ が音節末に現れた際に後続の分節音に調音点が同化して現れたものとして解釈する。

表１　仁多方言のモーラ一覧（出現頻度が低いモーラを括弧で囲んだ）[7]

音素表記	*a*	*i*		*e*	*o*	*ja*	*jo*	*wa*
音声表記	a	i - ɨ		e - ɛ̣	o - ọ	ja	jo	wa
音素表記	*(pa)*	*(pi)*	*(pu)*	*(pe)*	*(po)*	*(pja)*	*(pjo)*	
音声表記	(pa)	(pɨ)	(pɯ)	(pe)	(po)	(pʲa)	(pʲo)	
音素表記	*ba*	*bi*	*(bu)*[8]	*be*	*bo*	*bja*	*bjo*	
音声表記	ba	bɨ	(bɯ)	be	bo	bʲa	bʲo	
音素表記	*ma*	*mi*	*(mu)*	*me*	*mo*	*mja*	*mjo*	
音声表記	ma	mɨ	(mɯ)	me	mo	mʲa	mʲo	
音素表記	*ta*			*te*	*to*	*tja*		
音声表記	ta			te	to	tʲa		
音素表記	*da*			*de*	*do*	*dja*		
音声表記	da			de	do	dʲa		
音素表記	*na*	*(ni)*	*(nu)*	*ne*	*no*	*nja*	*njo*	
音声表記	na	(nɨ)	(nɯ)	ne	no	nʲa	nʲo	
音素表記	*ca*	*ci*			*co*	*cja*	*cjo*	
音声表記	tsa	tsɨ ~ tɕɨ			tso	tɕa	tɕo	
音素表記	*za*	*zi*		*ze*	*zo*	*zja*	*zjo*	
音声表記	dza	dzɨ ~ dʑɨ		dʑe	dzo	dʑa	dʑo	
音素表記	*ra*	*(ri)*	*(ru)*	*re*	*ro*	*rja*	*rjo*	
音声表記	ɾa	(ɽɨ ~ ɭɨ)	(ɽɨ ~ ɭɯ)	ɾe	ɾo	ɾʲa	ɾʲo	
音素表記	*sa*	*si*		*se*	*so*	*sja*	*sjo*	
音声表記	sa	sɨ ~ ɕɨ		ɕe	so	ɕa	ɕo	
音素表記	*ka*	*ki*	*ku*	*ke*	*ko*	*kja*	*kjo*	*kwa*
音声表記	ka	kɨ	kɯ	ke	ko	kʲa	kʲo	kʷa
音素表記	*ga*	*gi*	*gu*	*ge*	*go*	*gja*	*gjo*	*gwa*
音声表記	ga	gɨ	gɯ	ge	go	gʲa	gʲo	gʷa
音素表記	*ha*	*(hi)*[9]	*hu*	*he*	*ho*	*hja*	*hjo*	*hwa*
音声表記	ha	(çɨ)	ɸɨ ~ ɸɯ	he	ho	ça	ço	ɸa

[7] 表１のうち，/p/ を頭子音とするモーラは，漢語・外来語・擬音語・擬態語に集中して現れる。祖語の *p は，中央方言と同様に，語頭では [h ~ ɸ] に変化し，語中では，後ろの母音が /a/ の場合に [w] に変化し，その他の場合には消失したと考えられる。

[8] /bu/ が現れるのは *tob-*「飛ぶ」などの b を語幹末に持つ動詞の非過去終止連体形の末尾に限られ，/bu/ を撥音 /n/ と交替させた形式（*ton*「飛ぶ」）も確認される。なお，国広（1963）の記述する出雲市方言の音節一覧中にも /bu/ はない。

[9] 現在までに筆者の調査で /hi/ が含まれる形式が観察されたのは *ahii* [açɨː]「家鴨」の１語である。話者の記憶では幼少期にこの地域に家鴨はいなかったようで，他方言からの借用語の可能性がある。なお, /hi/ は国広（1963）の示す出雲市方言の音節一覧にはあるものの,「(　)」が付されている。

伝統的な仁多方言に音節 /nu, mu/ を含む語はない。筆者の調査では，/nu, mu/ という音節を含む語として，それぞれ *numa*「沼」と *kamuu*「被る」の 1 語ずつのみが確認されている。注意すべきは，これらとは別に「沼」「被る」を表す *cicin* と *kaberu* ~ *kabjae* という形が存在することである。このことと話者の直感を合わせ考えると *numa*，*kamuu* は，ともに借用語である蓋然性が高い[10]。また，音節 /ni/ も，*nita* [nɨta]「煮た」など，動詞「煮る」の活用形にしか確認されていない。この /ni/ に関する問題は 3.4.3 で扱う。一方, /ni/ と同じく鼻音と狭母音からなる音節ながら，/mi/ を含む語が少なくない点も注目される。この点は 3.2.4 と 3.3 で扱う。

狭母音 /u/ は語頭・語中含めて母音単独のモーラ・音節をなさないが，同じ狭母音でも，/i/ の場合には，母音単独のモーラ・音節を成す例が少数ながら存在する。ただ, /i/ の出現環境は限られていて, 母音の後（*sjooi* [ɕoːi]「醤油」, *kai* [kai̯]「貝」）か，/i/ のみからなる 1 音節語の *i* [ɨ]「湯」とそれを要素とする複合語 *iiri* [ɨːɨ]「風呂」（語源は「湯入り」）の中でしか現れない。2 音節以上の語の初頭に /i/ が現れる極めて稀な例として *ir-*「炒る」がある。この *ir-*「炒る」の問題については先の /ni/ の問題とあわせて 3.4.3 で触れる。

出雲諸方言では広く，*tonari* ~ *tonaa*「隣」，*saru* ~ *saa*「猿」のように /ri/ あるいは /ru/ を含む形式（*tonari*, *saru*）と，/ri/ あるいは /ru/ が脱落し，代わりにその前の母音が長音化された形式（*tonaa*, *saa*）とが併用される。ここでは，「/ri/ あるいは /ru/ が脱落し, 代わりにその前の母音が長音化され」る現象を, 友定（2008: 6）にならって「**r の隠在**」と呼び，*tonaa*, *saa* のように「/ri/ あるいは /ru/ が脱落し，代わりにその前の母音が長音化され」た形式を「**r の隠在形**」と呼ぶ。注目されるのは，廣戸（1950: 40–42）が指摘するように，仁多方言では /r/ の前の母音が /i, u, e/ の場合に，r の隠在形として他の出雲諸方言とは異なる形が見られることである。表 2 にその例を示した。なお，先の表 1 において括弧で囲んだ出現頻度が低いモーラのうち，/ni/ を除く /pa, pi, pu, pe, po; bu; mu; nu; ri; ru; hi/ が /r/ の前に現れる例は確認できておらず，表 2 に含めていない。一方，当該音節の出現頻度が一定程度ありながら，交替現象が起こる例が未確認であるものには表 2 の中に括弧を付して記した。

[10] 国広（1963: 19–20）の記述する出雲市方言でも /nu/, /mu/ という音節はないとされている。

表 2　仁多方言における「r の乙在」と「r の隠在形」（C は任意の子音）[11]

「r の隠在」規則	r 前の音節	例
(C)ar{i/u} → (C)aa	(C)a	*tonari ~ tonaa*「隣」，*saru ~ saa*「猿」
(C)or{i/u} → (C)oo	(C)o	*torikago ~ tookago*「鳥籠」，*oru ~ oo*「居る」
(C)ir{i/u} → (C)jaa	i	*iru ~ jaa*「炒る」
	bi	*(biri ~ bjaa), nobiru ~ nobjaa*「伸びる」
	mi	*(miri ~ mjaa), miru ~ mjaa*「見る」
	ni	*(niri ~ njaa), niru ~ njaa*「煮る」
	ki	*kiri ~ kjaa*「霧」，*kiru ~ kjaa*「着る」
	gi	*giri ~ gjaa*「旋毛」，*nigiru ~ nigjaa*「握る」
Cir{i/u} → Caa	ci	*ciri ~ caa*「釣り」，*ciru ~ caa*「釣る／鶴／散る」
	zi	*keziru ~ kezaa*「削る」，*(ziri ~ zaa)*
	si	*siri ~ saa*「尻」，*siru ~ saa*「汁／知る」
Cur{i/u} → Cwaa	ku	*kuri ~ kwaa*「栗」，*kuru ~ kwaa*「来る」
	gu	*meguri ~ megwaa*「擂粉木」，*moguru ~ mogwaa*「潜る」
	hu	*(huri ~ hwaa)*，*huru ~ hwaa*「降る／干く（干る）」
(C)er{i/u} → (C)jae	e	*eri ~ jae*「襟」，*(eru ~ jae)*
	be	*(beri ~ bjae)*，*kaberu ~ kabjae*「被る」
	me	*(meri ~ mjae)*，*jameru ~ jamjae*「止める」
	ne	*(neri ~njae)*，*neru ~ njae*「寝る」
	te	*(teri ~ tjae)*，*siteru ~ sutjae*「捨てる」
	de	*(deri ~ djae)*，*deru ~ djae*「出る」
	re	*(reri ~ rjae)*，*noreru ~ norjae*「濡れる」
	se	*seri ~ sjae*「芹」，*kaseru ~ kasjae*「貸す」
	ze	*(zeri ~ zjae), (zeru ~ zjae)*
	ke	*(keri ~ kjae)*，*akeru ~ akjae*「開ける」
	ge	*(geri ~ gjae)*，*negeru ~ negjae*「逃げる」

<u>/r/ の前が /a, o/ の場合</u>には，/ri/ あるいは /ru/ が脱落し，代わりにその前の母音が長音化される。一方，<u>/r/ の前が /i, u, e/ の場合</u>，/ri/ や /ru/ が脱落し，それに伴って /r/ の前の母音が長音化するとともに，母音の音質が変化する（/r/ の前が /i, u/ なら *kwaa*「栗」や *kjaa*「霧」のように /aa/[a:] に，/e/ なら *akjae*「開ける」のように /ae/[ae ~ æ:] となる）。さらに，/r/ の前の母音が /i/ や /e/ の場合には半母音 /j/ が挿入され，音声的には当該音節の頭子音が**口蓋化**する（*kiri ~ <u>kjaa</u>*「霧」，*seri ~ <u>sjae</u>*「芹」など）。ただし，当該音節が /ci/[tsɨ ~ tɕɨ], /zi/[dzɨ ~ dʑɨ], /si/[sɨ ~ ɕɨ] である場合には口蓋化が起こらない（*ciri ~ <u>caa</u>*「釣り」など）。一方，/r/ の前の母音が /u/ の場合には，当該音節の頭子音が**唇音化**することがある（*meguri ~ <u>megwaa</u>*「擂粉木」など）。これら「r の隠在」現象とそれに伴う母音の音質の変化や子音の口蓋化および唇音化

[11] この交替現象が観察されるのは，原則 /r/ の後ろの母音が /i/ あるいは /u/ の場合に限られる。ただし，指示代名詞 *are/kore/sore* や疑問代名詞 *dare/dore* については *aa/koo/soo* や *daa/doo* という交替形が見られる。使用頻度が高いことを背景にして，/r/ の後ろの母音が /e/ であるにもかかわらず「r の隠在化」が起こったものと考えられる。

は，3.4 で述べる「**r の隠在化とそれに伴う特殊音韻変化**」によって生じたものである。なお，表 2 のような交替が認められるのは，r の前の母音が短母音の場合に限られ，/r/ の前の母音が長母音や二重母音の場合には観察されない（*kooru*「凍る」，*kiiri*「きゅうり」，*hairu*「入る」）。その他に /ri/ や /ru/ が観察されたのは，外来語を除けば *riikiemo*「さつま芋」のみである。

また，/r/ を含む形式と /r/ を含まない形式は，仁多方言内でどちらも使用される。松江市方言や出雲市方言について上野（1981: 119; 2016: 28）が述べるように，この 2 つの形式は話者の中で結びついていると考えられる。ここでは上野（1981: 119）の考えに従い，/r/ を含む形式を基底形とした上で，2 つの形式を「場面に応じて使い分けられている」併用形とする。

3. 仁多方言における母音をめぐる音変化

本節では，2 節で記述した仁多方言の音素体系を踏まえ，この方言の先史に起こった音変化について論じる。以下，音変化を扱うという議論の性質上，具体的な語形を示す際は表 1 にある簡易的な音声表記を用いる。ただし，[ɯ] は u，[ɾ] は r で代用し，子音の口蓋化・唇音化は子音に j, w を添えてそれぞれ表記する（例えば [ɕɨ] は sji，[kʷa] は kwa とする）。また，長母音は同じ母音を 2 つ続けて表記する（例えば [aː] は aa とする）。/ci/[tsɨ ~ tɕɨ] のように音声的な揺れが観察される場合は表 1 中の左側にある表記（この場合は tsɨ）を用いるのを原則とし，その音声的な揺れが音変化を説明するのに重要な場合のみ，その揺れのどちらともを記す。

3.1. 仁多方言と古代語の音節対応と推定される音変化の概観

まず，仁多方言における母音をめぐる音変化を推定する際の基礎となる資料として，仁多方言と古代語の音対応の一部を**音節対応**の形で示す（表 3, 4, 5, 6）。なお，ここでは，古代語の音節はカナで表記する。丸括弧で囲んだものは，その対応を表す例が少数で，例外的と考えられるものである。

これらの音節対応と先述の音素・音節の分布制限，および，表 2 で示した「r の隠在」現象をもとにして推定される音変化は，概略（2）の 4 つの変化である。（2a–d）の変化は，ここに並べた順に起こったものと考えられる。なお，各変化の起こる条件については後で詳細に論じるため，ここでは省略している。

（2）　仁多方言に起こった母音をめぐる音変化

a.　*u, *i > ɨ（**中舌母音化**）

b.　*u > o（**後舌母音の低下**）

c.　*(C)ar{i,u}, *(C)or{i,u} > (C)aa, (C)oo（**r の隠在化**）
　　*Cir{i,u}, *Cur{i,u}, *(C)e{i,u} > C(j)aa, C(w)aa, (C)jae（**特殊音韻変化**）

d.　*i > e（**前舌母音の低下**）

表 3　仁多方言と古代語との音節対応（1）

古代語	仁多	仁多方言の例
チ[12]	tsɨ	tsɨtsɨ「乳」
ツ		tsɨtsɨmɨ ~ tsɨtsɨn「沼」
ジ，ヂ	dzɨ	kɨdzɨ「雉」
ズ，ヅ		kɨdzɨ「傷」
シ	sɨ	sɨma「島」
ス		sɨna「砂」
	so	（kusoo「薬」）
ソ		sode「袖」

表 4　仁多方言と古代語との音節対応（2）

古代語	仁多	仁多方言の例
ウ	o	osɨ「牛／臼」
オ，ヲ[13]		osɨ「雄」
イ，ヰ	e	ene「稲」
エ，ヱ		ebɨ「海老」
ユ		ebɨ「指」
	i	i「湯」，kai「粥」
ヨ	jo	joru-「緩い」
		jomogɨ「蓬」

表 5　仁多方言と古代語との音節対応（3）

古代語	仁多	仁多方言の例
モ	mo	momo「桃」
ム		mosɨ「虫」
	mɨ	mɨkasɨ「昔」
ミ		mɨnan「南」[14]
	me	medzo「溝」
メ		mesɨ「飯」
ノ	no	nomɨ「鑿／蚤」
ヌ		nosɨ「主」
	ne	neka「糠」
ニ		nesɨ「西」
	(nɨ)	（nɨ-「煮る」）
ネ	ne	nedzɨn「鼠」

表 6　仁多方言と古代語との音節対応（4）

古代語	仁多	仁多方言の例
フ	ɸɨ ~ ɸu	ɸɨkuro ~ ɸukuro「袋」
ヒ		ɸɨkaa ~ ɸukaa「光」
	(hɨ)	（ahɨɨ「家鴨」）
ヘ	he	hedzɨkko「肘」
		heso「臍」
ボ	bo	ebo「疣」
ブ		kwaabosɨ「踝」
	(bu)	（mosɨbu「運ぶ」）
ビ	bɨ	mabɨta「瞼」
		hebɨ「ひび」
ゴ	go	negor-「濁る」
グ		nogo(w)-「拭う」
	gu	jagura「櫓」

（2）のうち，（2a, b, d）の 3 つの音変化が，本稿の主たる対象である「**母音をめぐる音変化**」である。これらは**分裂**（split）と**合流**（merge）を伴う音韻変化で，起こる条件は複雑である。表 7 に，その母音音素の分裂と合流の概略を，各変化が起こった条件とともに示した。網掛けは，当該の音変化によって母音音素の合流と

[12] 中央方言のタ行子音は古く「チ」「ツ」を含めて全て破裂音 t で，ダ行子音も「ヂ」「ヅ」を含めて全て破裂音 d だったと考えられる。本来は，出雲方言における音変化を考える場合にも，これらに対応する音節の頭子音が破擦音となった過程について考えるべきである。現状，筆者は，出雲地域諸方言の共通祖語の段階で「チ」などの音節の頭子音は全て破擦音化していたと考えているが，詳細な検討には至っていない。今後の課題とし，本稿では当初から破擦音化していたとして議論を進める。

[13] この方言では，歴史的仮名遣いのオとヲ，イとヰ，エとヱ（とヤ行「エ」）に対応する音節の対立は保たれておらず，o, i, e と対立する wo, wi, we(, je) という音節は存在しない。

[14] この mɨnan「南」の例に見られるように，古代語 mi（ミ），mu（ム），nu（ヌ）に対応する音節は，語末で仁多方言の /n/（撥音）に対応する場合がある。一方で，*eno*「犬」のように語末でも古代語の nu（ヌ）が仁多方言で /no/ に対応する例がある。不明な点が多いが，本稿ではこの場合の音節対応についての議論を保留する。ただし，注 20 を参照。

分裂が起こった部分である。

表 7　仁多方言における母音音素の分裂と合流の概略

(2a) 中舌母音化 *u, *i > ɨ			(2b) 後舌母音の低下 *u > o			(2d) 前舌母音の低下 *i > e	
*a	(変化なし)	*a	(変化なし)	*a	(変化なし)		a
*e	(変化なし)	*e	(変化なし)	*e	(変化なし)		e
*i	下記以外 / {m, n, b}_Ca / {ts, dz, s}_	*i		*i	/ m_, n_, #_, h_Ci 上記以外		
		*ɨ	/ n_* (*n の後で i と ɨ の対立が消失)	*ɨ			i[ɨ]
*u	/ {ts, dz, s}_ / {m, n, b}_Ca						
	上記以外	*u	下記以外 / m_, n_, #_, j_r	*u	(変化なし)		u
*o	(変化なし)	*o	(変化なし)	*o	(変化なし)		o

表 7 から明らかなように，(2a, b, d) のそれぞれの変化が起こった条件は複雑である。また，例外的と思われるものも少なからずある。以下では，特に (2a, b, d) のそれぞれの変化が起こった条件と音声学的背景および各変化の相対年代について詳しく検討する。議論の都合上，まず (2a, b) を 3.2 で扱い，その後に (2d) について 3.3 で扱う。3.4 では，残る (2c) の変化について扱い，それと (2a, b, d) の諸変化との関係を検討する。3.5 は 3 節のまとめである。

3.2. 中舌母音化 *u, *i > ɨ と後舌母音の低下 *u > o

3.2.1. 歯茎破擦音・摩擦音の後での中舌母音化と *u と *i の合流

2 節で述べたように，仁多方言では歯茎破擦音 ts, dz と摩擦音 s の後で /u/ と /i/ の対立が完全に失われている。これは表 3 で示した音対応から推定されるように，仁多方言において，次の (3) に示した歯茎破擦音・摩擦音の後での**中舌母音化** *u, *i > ɨ が起こり，それによって *u と *i の合流 (= (4)) が起こったためである。

(3)　*u, *i > ɨ / {ts, dz, s} _ (歯茎破擦音・摩擦音の後での**中舌母音化**)

(4)　ts, dz, s の後での *u と *i の合流を示す例

a.　*tsutsumi > tsɨtsɨn「沼・ため池」, *tsume > tsɨme「爪」, *natsu > natsɨ「夏」
　　*tsitsi > tsɨtsɨ「乳」, *hetsima > hetsɨma「糸瓜」, *hatsi > hatsɨ「蜂」

b.　*kidzu > kɨdzɨ「傷」, *midzu > medzɨ「水」, *nedzumi > nedzɨn「鼠」
　　*kidzi > kɨdzɨ「雉」, *nidzi > nedzɨ「虹」, *kudzira > kudzɨra「鯨」

c.　*suna > sɨna「砂」, *usu > osɨ「臼」, *musume > mosɨme「娘」
　　*sima > sɨma「島」, *usi > osɨ「牛」, *musiro > mosɨro「筵」

表 1 から明らかなように，仁多方言における音素 /i/ は子音の後では中舌母音 ɨ で実現する。共通語の場合でも /u/ は歯茎破擦音 ts, dz と摩擦音 s の後では聴覚的

に中舌的な印象を持つが，これは仁多方言でも同様だったと考えられる。つまり，ts, dz, s の後での *u と *i の対立の消失は，音素 /i/ の音声的実現が中舌母音 ɨ に変化し，もともと中舌的な印象のあった *u と合流した結果だと考える。以上のように考えれば，(3) の音変化を自然な音変化として仁多方言の先史に推定することができ，また，表 3 の音節対応も (3) の音変化とそれに伴う *u と *i の合流（= (4)）によるものと説明できる。ただ，表 3 にある古代語 su(ri)（ス（リ））に仁多方言で so(ri) ~ so(o) が対応する kusoo「薬」などの例外もある。この問題については 4 節で扱う。

3.2.2. 鼻音・有声両唇破裂音の後および両唇摩擦音の後での中舌母音化

表 4, 5, 6 で示した音対応からは，古代語の mu（ム）と mi（ミ）がともに仁多方言の mɨ に対応する場合があるなど，ts, dz, s 以外の子音の後でも *u と *i が中舌母音化し，合流したことが示唆される。表 8 に，ts, dz, s 以外の子音の後で *u と *i とが合流したことを示す例をあげる（ここでは，後に述べる音変化の条件からは例外と思われるものも記し，下線を付した）[15]。

表 8　ts, dz, s の後以外で *u と *i とが合流したことを示す例

古代語	仁多	例（仁多方言の形式の簡易音声表示）
mu（ム）	mɨ	mɨkasɨ (~ mokasɨ)「昔」，mɨkade「百足」，mɨkago「むかご」 mɨnanto「胸」，<u>mɨkoo「向こう」</u>，<u>mɨko (~ moko)「婿」</u>
mi（ミ）		mɨgara「身体」, mɨnato「港」, mɨnan「南」, <u>mɨmɨ ~ mɨn「耳」</u>, <u>mɨdorɨ「緑」</u>
bu（ブ）	bɨ	mabɨta「瞼」，abɨra「油」，<u>kabɨto「兜」</u>，<u>mabɨ「間歩」</u>
bi（ビ）		kutsɨbɨɨ「唇」，enbabɨkaa「稲光」
pu（フ）[16]	ɸu ~ ɸɨ	ɸuro「風呂」，ɸutaa「二人」，ɸuke「ふけ」
pi（ヒ）		ɸutotsɨ「一つ」，ɸudza「膝」，ɸuge「髭」，ɸu「火」

表 8 からは，m, b, ɸ の後ろで *u と *i が合流していることが分かる（mɨkasɨ「昔」，mɨnato「港」; mabɨta「瞼」, kutsɨbɨɨ「唇」; ɸutaa「二人」, ɸutotsɨ「一つ」）。m, b, ɸ の後での *u と *i の合流も ts, dz, s の後での場合と同様，m, b, ɸ（< *p）の後で前舌狭母音 i が中舌母音 ɨ に変化したことが関係していると考える。例えば，古代語の pi（ヒ）が，仁多方言で /hu/ [ɸɯ ~ ɸɨ] で現れるのは，（*pi >）*ɸi > ɸɨ ~ ɸɯ（= /hu/ [ɸɨ ~ ɸɯ] < *pu）という変化の結果である（3.3.1 で詳述）。*mu > mɨ，*bu > bɨ も同様で，*mi > mɨ，*bi > bɨ という変化の結果，/mi/, /bi/ の音声的実現が mɨ, bɨ となり，/mu/,

[15] 例外としたもののうち，mɨkoo「向こう」は，それが後続音節に a を含む *mukap-「向かう」と関連する形式であることから，第 1 音節の母音が i であることは説明可能である。一方，kabɨto「兜」と mabɨ「間歩」については有効な説明がなく，現状では完全な例外とせざるを得ない。その他，mɨko「婿」については注 18 を，mɨmɨ ~ mɨn「耳」と mɨdorɨ「緑」については注 20 をそれぞれ参照されたい。

[16] 古代語（上代語）のハ行子音を破裂音 p とするか摩擦音 ɸ とするかの定説はないが，最も古い段階では p であったと考え，暫定的に p としておく。全体の議論への影響はない。

/bu/ のそれに近づいたために，それぞれの音節が合流し得た[17]。後述の ni と nu の合流も同様に *ni > nɨ という変化に起因すると考えられる。

3.2.3. u と i の中舌母音化の条件

表 5 にあげた mosɨ「虫」，mosɨro「筵」，mogɨ「麦」の例からも分かるように，仁多方言では，古代語の mu（ム）が，mi（ミ）だけでなく mo（モ）にも合流している。つまり，仁多方言では，古代語の mu（ム）と mi（ミ）の合流は無条件なものではない。これは，pu（フ）と pi（ヒ），bu（ブ）と bi（ビ），nu（ヌ）と ni（ニ）の場合も同様である。

仁多方言での古代語 mu（ム），bu（ブ），nu（ヌ）に対応する音節の現れを見ると（＝表 9），m, b の後では，後続音節の主母音が a の場合，古代語の u が仁多方言の ɨ に対応している（mɨkade「百足」，abɨra「油」）。一方，n の後では，後続音節の主母音が a の場合，古代語の u が仁多方言の e に対応している（neka「糠」）。そして，その他の環境では古代語の u が仁多方言の o に対応している（moika「六日」，kobosɨ「拳」，tanokɨ「狸」など）[18]。

表 9　*mu，*bu，*nu の分裂を示す例

古代語	仁多	例（仁多方言の形式の簡易音声表示）
mu（ム）	mɨ	mɨkasɨ (~ mokasɨ)「昔」, mɨkade「百足」, mɨkago「むかご」, mɨnanto「胸」
	mo	mosɨ「虫」，mosɨro「筵」，mogɨ「麦」，moser-「咽せる」，mokudoo「椋鳥」，moika「六日」
bu（ブ）	bɨ	mabɨta「瞼」，abɨra「油」
	bo	kobosɨ「拳」，obogɨ「産衣」，kwaabosɨ「踝」
nu（ヌ）	ne	neka「糠」
	no	tanokɨ「狸」, nosɨ「主」, noku-「暖かい」, nore-「濡れる」, sɨn(or)-「死ぬ」

[17] pi（ヒ）・pu（フ）の場合と mu（ム）・mi（ミ）および bu（ブ）・bi（ビ）の場合とでは，前者が /hu/ という母音 /u/ を持つ音節に合流した一方，後者の mu（ム）・mi（ミ）および bu（ブ）・bi（ビ）の場合は母音 /i/ を持つ音節 /mi/，/bi/ に合流したという違いがあるが，これは音韻的解釈による。想定される音韻変化としては，pi（ヒ）・pu（フ）の場合と，mu（ム）・mi（ミ）および bu（ブ）・bi（ビ）の場合で異なるものではなく，それぞれの子音の後での /i/ と /u/ の合流としてひとまとめにできると考える（3.2.4 参照）。

[18] 表 9 の中に含まれない音節対応の例外に，norakas-「濡らす」，nota「饅」，bota「豚」がある。このうち norakas-「濡らす」は，nore-「濡れる」から派生した動詞であり，その派生が nu > no の音変化の後に起こったとすれば説明可能である。nota「饅」は完全な例外で，その対応を説明することができない（注 26 も参照）。bota「豚」についても，今有効な説明を考えられない。この他，mɨkasɨ ~ mokasɨ「昔」，mɨko ~ moko「婿」，tenego ~ tenogo「手拭い」，nek- ~ nok-「抜く」といった揺れがあるものも存在する。このうち mɨko，tenego は仁多方言と古代語との対応からは例外的に見えるものの，出雲市方言と古代語との対応からは規則的な対応を示すものとして認められる形式であり（国広 1963: 23），出雲市方言（あるいは同様の対応を示す出雲地域の他方言）からの借用形式の可能性もある（tenego については注 22 も参照）。また，nek- ~ nok-「抜く」に揺れが見られるのは，この語が活用する動詞で，k の後の母音が活用形によって入れ替わることが関係していると思われる。mokasɨ「昔」については，共通語の mu の多くがこの方言で mo に対応することから類推によって生じた可能性が考えられるが，詳細は不明である。

ここでは，3.2.1 で扱った ts, dz, s の場合と同様に，m, b, n が先行する環境でも i は中舌母音化して ɨ となったため，*u と合流し得たと考える。ただ，上述のように後続音節の主母音によって対応関係が異なる点には注意が必要である。上で示した対応関係からすると，m, b, n の後での**中舌母音化**，および，*u と *i の合流は，後続音節に広母音 a があるという環境でのみ起こり（＝（5）），その他の環境では起こらなかったと考えられる[19]。

（5）　*u, *i > ɨ / {m, n, b}_Ca（鼻音・有声両唇破裂音の後での**中舌母音化**）

後述するように，この（5）の変化の影響を受けなかった *mu, *bu, *nu は，後に「鼻音の後での**後舌母音の低下**」（＝（6），*muika > moika, *tanuki > tanokɨ）や，「後舌母音の**高さの同化**」（＝（9），*kobusɨ > kobosɨ）によって mo, no, bo に変化した（3.2.5 を参照）。

3.2.4. 中舌母音化当初の *i, *u, *ɨ の対立

3.2.3 で述べたような形での中舌母音化が認められるとして，筆者は，表 10 に示すように（5）の中舌母音化が起こった当初は，少なくとも両唇音 m, b の後で *i, *u と中舌母音 *ɨ が対立する（少なくとも音声的には異なる）状態があったと考える。つまり，後続音節に a が含まれる場合，*mu と *mi，*bu と *bi とがそれぞれ合流し，中舌母音 *ɨ を主母音とする *mɨ および *bɨ となったが，それらの主母音である中舌母音 *ɨ は，*mu・*bu と合流しなかった *mi・*bi の主母音である前舌母音 *i とは区別されていた。後に，(11) 鼻音 m の後での**前舌母音の低下** *i > e で me になったのは，このうちの前舌母音 *i を含む mi のみである（3.3.1）。

表 10　*mi と *mu の分裂と合流

		（5）*u,*i > ɨ / _Ca		（6）*u > o		（11）*i > e
*migi「右」	=	*migi	=	*migi	>	megɨ
*migara「身体」	>	*mɨgara	=	*mɨgara	=	mɨgara
*mukade「百足」	>	*mɨkade	=	*mɨkade	=	mɨkade
*musiro「筵」	=	*musɨro	>	*mosɨro	=	mosɨro

[19] 後続音節に広母音 a があるという環境でのみ，b, m, n の後での中舌母音化，および，*u と *i の合流が起こるということについての音声学的説明は容易でない。詳細については今後の課題とするが，現時点では以下のように拍の強弱と関連づけて考えられるのではないかという見通しを持っている。すなわち，出雲地域諸方言では，ɸune「船」や ɸuna「鮒」のように，狭母音 i, u を含む拍（N）に非狭母音 a, e, o を含む拍（W）が続く場合，（特に 2 拍名詞の場合には）原則として，その N は後続の W よりもピッチが低くなる。これは，この地域で起こった [N]W ＞ N[W]（[がピッチの上昇位置，] がピッチの下降位置を示す）というアクセント変化の反映と考えられる。この変化の背景には，非狭母音を含む W が狭母音を含む N より相対的に「強」いことがあると考える（上野 1985: 247）。筆者は，その相対的に「強」くなる W の中でも広母音 a を含む拍 W_a が最も強く，それゆえ NW_a という構造を持つ語（*nuka「糠」）では，他の NW 構造の語（*ɸune「船」）よりも第 1 拍の N の「弱さ」が顕著で，結果として N に含まれる狭母音 u と i が弱化し，その区別が早い段階で曖昧になり得たものと考える。

このように考えることで，古代語 mi（ミ）に対応する音節が，多くの場合，現代仁多方言の me で現れる一方で，その後続音節に a が含まれる場合にのみ仁多方言で mɨ で現れることについての説明が可能となる（(11) 前舌母音の低下 *i > e については 3.3.1 を参照）。また，mɨkade のように古代語 mu（ム）に遡る mɨ が me に変化していないことも，表 10 に示したような一連の変化の過程を想定することで説明される [20]。なお, 表 10 中の *musɨro > *mosɨro の変化は, 3.2.5 で詳述する (6)「鼻音の後での**後舌母音の低下** *u > o」によるものである。

また，古代語の nu（ヌ）に対応する音節の一部が ne（ネ）に対応する音節と合流しているが，これは *nu と *ni が合流して *nɨ となった後，さらに *nɨ > ne という変化が起こったためである（neka「糠」）。注意したいのは，n の後では u と i の合流が m の後よりも早く進み，*nɨ > ne の変化の前には（後続音節の母音の種類にかかわらず）全ての nu と ni が合流し，*nɨ（音韻的には /ni/）になっていたという点である。このことは 3.3.1 で詳しく述べる。

なお, 古代語 ju（ユ）は, 仁多方言で, jo だけでなく, i や e にも対応する (joru-「緩い」, i「湯」, ebɨ「指」)。また，仁多方言では，古代語 pi（ヒ）に対応する音節が古代語の pu（フ）に対応する音節に合流し，ɸu ~ ɸɨ と実現する（ɸudza「膝」, ɸukaa「光」, ɸuge「髭」, ɸutorɨ「一人」など)。一方，同じ古代語 pi（ヒ）に対応する音節であっても，後続音節に /i/ がある場合には古代語 pe（ヘ）に対応する音節 he に合流している（hesɨgata「菱形」, hedzɨ(kko)「肘」, hebɨ「燁」)。これら古代語 ju（ユ）や pi（ヒ）に対応する音節に関する問題は 3.3 で扱う。

3.2.5. 後舌母音の低下 *u > o の条件

(3) および (5) の**中舌母音化** *u > ɨ から取り残された u の一部は，その後，**後舌母音の低下** *u > o によって o に変化した。表 3, 4, 5, 6 に示した音節対応からは，後舌母音の低下は，鼻音 m, n の後（mosɨ「虫」, nosɨ「主」など），語頭（osɨ「牛」など），j の後（jori ~ joo「百合」など）という条件で起こったと考えられる。

Campbell（2020: 39–40）は，**母音の低下**（vowel lowering）が起こりやすい環境の 1 つに，母音が鼻音化していることを挙げている。mosɨ「虫」, nosɨ「主」などで後舌母音の低下が起こった「鼻音 m, n の後」という環境は，Campbell の言う「母音が鼻音化している」という環境に準ずるものと言える。そのため，(6) のような変

[20] 現代仁多方言で観察される mɨ は, mɨ-「見る」などの動詞語幹末に見られるものを除けば, 原則として後続音節に a が現れるものしかないが，例外の 1 つに mɨmɨ ~ mɨn「耳」がある。これは mɨn という 1 音節の交替形の存在と，同じく 1 音節語の i「湯」が †e でないことを考慮すると，1 音節語で母音の低下が起こらなかったためと考えられる。表 8 に掲げたもう 1 つの例外である mɨdorɨ「緑」は借用語の可能性があり，仁多方言では一般に「緑」を ao と言う。今一つ確認されている例外は momɨdzɨ「紅葉」である。この momɨdzɨ という形式は，(11) に示した *mi > me という変化が語頭でのみ起こった変化であることを示唆するものだが，この他にそれを強く支持するデータは手元にない。今後の課題としたい。なお，momɨdzɨ 以外で語中に *mi を含むものは，nanda（< *namida）「涙」のようにその *mi が撥音になっている。

化を考えることに無理はないだろう。

(6)　*u > o / m, n_（鼻音の後での**後舌母音の低下**）

これに対して，たとえば osɨ「牛」，oma「馬」などに見られるような語頭での後舌母音の低下 *u > o に関しては，その音声学的動機付けは十分でない。ただし，Campbell（2020: 39–40）は，母音の低下は特に条件がなくても起こり得るともしており，また，表 11 の上段に示すように，仁多方言では語頭の u と o に対立がなく，*u > o という変化が，その環境で無条件に起こったことは疑いない。

表 11　語頭および j の後での仁多方言 o と古代語 u の対応例

古代語	仁多	例（仁多方言の形式の簡易音声表示）
u（ウ）	o	orɨ ~ oo「瓜」，osɨ「牛 / 臼」，okur-「送る」 cf. ome「梅」，osagɨ「兎」，oroko「鱗」，
ju（ユ）	jo	jorɨ ~ joo「百合」，joru-「緩い」，jore-「揺れる」 cf. eka「床」，ekɨ「雪」，edzɨ「柚子」，eme「夢」

ここでは，その音声学的動機付けの詳細については今後の課題とし，(7)「語頭の**後舌母音の低下**」が仁多方言の先史に起こったものと認める。なお，ここで詳述しないが，表 11 の下段に示した古代語 ju（ユ）に仁多方言 jo が対応する例からは，語頭の j と r の間という条件でも**後舌母音の低下** *u > o が起こったと考えられる（= (8)）[21]。

(7)　*u > o / #_（語頭の**後舌母音の低下**）
(8)　*u > o / #j_r（j の後の**後舌母音の低下**）

さて，表 6 の音節対応からは，鼻音 m, n の後や語頭および j の後という環境の他に，b, g の後という環境でも後舌母音の低下が起こったように見える（kwaabosɨ「踝」，nogo(w)-「拭う」）。表 12 に関連する例を挙げる。

表 12　b, g の後での仁多方言 o と古代語 u の対応例

古代語	仁多	例（仁多方言の形式の簡易音声表示）
bu（ブ）	bo	kobosɨ「拳」，obogɨ「産衣」，kwaabosɨ「踝」，bota「豚」 cf. mabɨta「瞼」，abɨra「油」，kabɨto「兜」，mabɨ「間歩」
gu（グ）	go	ogoisu「鶯」，tenogo(~ tenego)「手拭い」 cf. megurɨ ~ megwaa「擂粉木」，jagura「櫓」，hutaiguci「額」

[21] 半母音 j はそれ単独であれば後ろの母音を前舌化，あるいは，上昇させるものである一方，当該母音の後ろにある r は，この方言ではそり舌音であり，前の母音を広く（低下）させ，広母音 a に変化させうる特徴を持っていた（3.4 参照）。詳細は不明であるが，語頭の j と r に挟まれた母音 u は，その両者の影響を受けた結果，広母音 a までは広くならないが，狭母音 u のままにはとどまらず，中間の o に落ち着いたものと考えられる。

筆者は，表 12 に掲げた b, g の後で古代語 u が仁多方言 o に対応するものについて，それらは当該母音が直前の音節の主母音へ**高さの同化**（＝（9））を起こして生じたものだと考える。

（9）　*u > o / {a, o}{b, g}_（後舌母音の**高さの同化**）

表 12 の，古代語 bu（ブ），gu（グ）が仁多方言で bo, go に対応する諸形式を見ると，語頭に bo を持つ bota「豚」以外は，その前に o か a という非狭母音がある。現状，それ以外に，古代語の bu, gu が仁多方言の bo, go に対応する場合とそうでない場合とを区別する条件を見出し難い。したがって，表 12 に見られる対応に対する説明としては，（9）に記述したように，*bu, *gu の主母音 *u が前の音節の非狭母音 o, a へ同化した結果 bo, go となったとするのが，現状最も妥当な説明だと考える [22,23]。

なお，*ku > ko, *ɸu > ho という変化が起こらなかった（akubɨ「欠伸」，hokuro「黒子」，ɸuru-「古い」）のは，無声子音 k 及び ɸ の後では狭母音 u が無声化していた（音声的に u が無音であった）ためと考えられる。

3.3. 前舌母音の低下 *i > e

3.2 で推定した（3）や（5）の中舌母音化によって，古代語の前舌母音 i に対応する母音のうち，tsɨtsɨ「乳」や kɨdzɨ「雉」などの歯茎破擦音・摩擦音 ts, dz, s の後の *i は全て中舌母音 ɨ に変化して *u と合流した（＝（3））。また，鼻音 m, n や両唇音 b の後でも，*migara「身体」や *abira「油」のように，後続音節の母音が a であるという条件の下では *i の中舌母音化が起き（*migara > mɨgara, *abira > abɨra），*u と合流した（＝（5））。

一方，中舌母音化を経験せず *i のままであったものの一部は，以下で検討する**前舌母音の低下** *i > e により，e に変化したと考えられる（*migi > megɨ「右」，*nisɨ > nesɨ「西」）。以下，この前舌母音の低下 *i > e について，その生じた条件と音声学的な背景を考察する。

---

[22] 古代語 ru（ル）が仁多方言 ro に対応する現状唯一の例として orosɨ「漆」がある。この場合もまた，語頭で *u > o が起きて *urusi > *orusɨ となった後に，第 1 音節の母音への同化によって第 2 音節の母音が o となったと考える。また，注 18 では出雲市方言からの借用形式とした tenego の第 2 音節 e についても，*tenugu > *tenegu という前の音節主母音への同化の結果生じた可能性がある。その場合，tenogo という形式は，*te「手」+ *nuguw-「拭う」という語源意識があったところに，*nuguw- > *noguw- > nogow-「拭う」という音変化が起こったことで生じた形式と考えられる。なお，この子音を挟んでの母音の同化現象は，現在までに確認した範囲では，当該の子音が b, g, r(, n) の場合に限られる。

[23] mu, nu（と語頭，および，j と r の間の u）の場合に比べて，古代語 bu（ブ），gu（グ）に対応する音節の場合，現代仁多方言における現れには不規則な部分が多く，両者は，別のメカニズムによる変化と考えるべきだろう。本文中で述べた変化は，その 1 つの可能性を示したものである。tenego「手拭い」については注 18 と注 22 も参照。

3.3.1. 前舌母音の低下 *i > e の条件

表 13 には，語頭において，古代語の i が仁多方言の e に対応する例を関連する例とともに挙げた。

表 13　語頭における *i と *e の合流

古代語	仁多	例（仁多方言の形式の簡易音声表示）
i（イ）	e	eka「烏賊」，ekɨ「息」，etsɨtsɨ「五つ」，eto「糸」，ene「稲」
e（エ）		e「柄」，eda「枝」，ebɨ「海老」，eto「干支」

表 13 からは，語頭の *i は無条件に e に変化したように思われる。後舌母音の低下 *u > o の場合と同様，語頭という環境で母音の低下 *i > e が生じやすいことを説明できないことは問題だが，現状，語頭で**前舌母音の低下** *i > e が起こったと考えざるを得ない（＝（10））。

（10）　*i > e / #_（語頭における**前舌母音の低下**）

次に鼻音 m, n の後で，*i と *e とが合流している例を表 14 に挙げる。

表 14　鼻音の後での *i と *e の合流

古代語	仁多	例（仁多方言の形式の簡易音声表示）
mi（ミ）[24]	mɨ	mɨgara「身体」，mɨnato「港」，mɨnan「南」
	me	metsi「道」，medzi「水」，meçe「店」，meso「味噌」
me（メ）		ame「雨」，mesɨ「飯」，me「目」，
ni（ニ）	ne	newa「庭」，nesɨ「西」，neku「肉」，neçe「偽」，negor-「濁る」
ne（ネ）		ne「根」，nedzɨn「鼠」，neko「猫」

既述の通り，Campbell（2020: 39–40）は，母音の低下が起こりやすい条件の 1 つとして，母音の鼻音化を挙げており，後舌母音の低下 *u > o の場合と同様，鼻音 n と m の後での前舌母音の低下 *i > e は，一般言語学的観点から見て自然な変化と考えられる。

表 14 からは，この時，*mi > me が後続音節に a が含まれない場合にのみ起こったように見える。筆者は，その背景に，3.2.4 で述べた，この段階には両唇音 m の後で前舌母音 *i が中舌母音 *ɨ と区別されていたことがあると考える。つまり，3.2.4 で述べたとおり，後続音節に a がある mɨgara「身体」や mɨnato「港」などの場合にのみ *mi > mɨ という変化が起こり，その他の環境では，*mitsi「道」，*mise「店」などのように *i が前舌母音 i のまま保たれた。そして，この *mitsi「道」，*mise「店」

[24] この表に示したものの他，古代語 mi（ミ）に仁多方言 ne が対応する nekan「蜜柑」（古代語 mikan）という例もあるが，ここでは詳しくは取り上げない。ただ，この形式の祖形が *mikan であるとすれば，語頭における *m > n という変化は母音の低下 *i > e よりも前に起こったと考えられる。後述のとおり，*mi > me が起こる場合，後続音節の母音は原則として a 以外である一方，*ni > ne は無条件で起きたと考えられる。仮に *mikan の段階で母音の低下 i > e が起こったならば，第 2 音節に a があるために，†mekan とはなり得ない。

などに含まれる前舌母音 *i が，両唇音 m の後という条件で，前舌母音の低下 *i > e により e に変化したのである（*mitsɨ > *metsɨ「道」，*mise > *mese「店」）。すなわち，m の後における前舌母音の低下 *i > e は，見かけ上，後続音節に a が含まれない場合にのみ起こったように見えるが，実際は m の後の前舌母音 *i が無条件に e になったと考えられるのである（＝（11））。

（11）　*i > e / m_（鼻音 m の後での**前舌母音の低下**）

そして，このような考え方が認められるのならば，（5）に示した中舌母音化は，（11）の鼻音 m の後での前舌母音の低下が生じる前に起こったということになる。

一方で，歯茎音 n の後では m よりも早く *i と *ɨ の対立が失われていたと考える[25]。このとき，音声的には前舌母音 i と中舌母音 ɨ とで揺れていた可能性もあるが，少なくとも音韻的には /ni/ と解釈され得るものになっていただろう。その後，*nɨka（< *nuka）「糠」の第 1 音節のような古代語の nu（ヌ）に対応するものも含め，この時点で /ni/[ni ~ nɨ] であったもの全てが，**前舌母音の低下** *i > e によって ne になったのである（＝（12））[26]。

（12）　*i ~ *ɨ> e / n_（鼻音 n の後での**前舌母音の低下**）

さて，この他に古代語の i が仁多方言の e に対応する場合としては，表 15 に挙げる古代語 pi（ヒ）に対応するものの例がある。

表 15　古代語 pi（ヒ）と pe（ヘ）の合流と分裂

古代語	仁多	例（仁多方言の形式の簡易音声表示）
pi（ヒ）	ɸɨ ~ ɸu	ɸɨkari ~ ɸukari「膝」，ɸɨge ~ ɸuge「髭」，ɸɨtotsɨ ~ ɸutotsɨ「一つ」
	he	hebɨ「燁」，hesɨgata「菱形」，hedzɨkko「肘」
pe（ヘ）		hera「へら」，hetsɨma「糸瓜」，heso「へそ」

表 15 から明らかなように，古代語 pi（ヒ）に対応するものは後続の音節に /i/ を含む場合にのみ，古代語の pe（ヘ）に対応する音節 he と合流している。一方，その他の場合には古代語の pu（フ）に対応する音節 ɸɨ ~ ɸu に合流した。

[25] *mi と *mɨ とが対立していた段階では，両者を区別したのは子音の口蓋化の有無であったと考えられる。一般に両唇音の口蓋化の有無の対立は，歯茎音のそれよりも保たれやすい。そのために *mi と *mɨ の対立は *ni と *nɨ の対立が失われた後も保持されたと考えられる。

[26] 実際は，古代語 nu（ヌ）に仁多方言の ne が対応する例は neka「糠」の例しかないため，これを例外とし，古代語の nu（ヌ）は原則として仁多方言で no に対応するということもできる（注 18 で，nota「饅」（< nuta）を対応の完全な例外としたことも参照）。しかし，その場合，なぜ m の後では後続母音に a を含む場合に中舌母音化が起こったにもかかわらず，n の後では中舌母音化が全く起こらなかったかの説明に窮する。ここでは，m と n の後で同じように中舌母音化をしたと考えておきたい。詳細は不明だが，nota は新しく入った語で，この方言で共通語 nu のほとんどが no で対応することを背景に，nuta という共通語形から類推によって生じた形と考えておく。

筆者は，下の表 16 で *ɸikari「光」，*ɸibi「燁」を例にして示したように，母音 *i は両唇摩擦音 ɸ の後で一度**中舌母音化**したものの，音声的には ɨ と u の間で揺れていた段階があったと想定する。そして，ɸibɨ「燁」のように後続音節に前舌母音 i がある場合，ɨ と u の間で揺れていた ɸ の後の当該の母音が，後続母音 i の**前舌性に同化**し，前舌母音 i で安定した。その後，前の子音が両唇音 ɸ から声門音 h に変化したことに伴い，その i は e へと変化した[27]。一方，後続音節に母音 i がない場合は，当該母音は ɨ ~ u のまま現在に至った。

表 16　*pi >*ɸi（ヒ）と *pe > *ɸe（ヘ）の分裂と合流

		(13) *u, *i > ɨ / ɸ_		(14) *ɨ ~ *u> i / ɸ_Ci		(15) *ɸ > h / _{i, e} *i > e / h_
*ɸukuro「袋」	>	*ɸɨkuro ~ *ɸukuro	=	*ɸɨkuro ~ *ɸukuro	=	ɸɨkuro ~ ɸukuro
*ɸikari「光」	>	*ɸɨkari ~ *ɸukari	=	*ɸɨkari ~ *ɸukari	=	ɸɨkari ~ ɸukari
*ɸibi「燁」	>	*ɸɨbi ~ *ɸubi	>	*ɸibi	>	hebi
*ɸeso「臍」	=	*ɸeso	=	*ɸeso	>	heso

つまり，以下の（13–15）に挙げる音変化がこの順番に生じたことを提案することになる。

（13）　*u, *i > ɨ / ɸ_（両唇摩擦音の後での中舌母音化）
（14）　*ɨ ~ *u > i / ɸ_Ci（中舌母音が後ろの前舌狭母音 i の影響で前舌母音として安定）
（15）　*ɸ > h / _{i, e}, *i > e / h_（前舌母音 *i, *e の前での両唇音 *ɸ の声門音化，および，それに伴う前舌狭母音 *i の低下）

3.3.2. 古代語 ju（ユ）に対応する仁多方言の i, e について

次に，古代語 ju（ユ）に仁多方言 i, e が対応する場合について検討する。古代語 ju（ユ）は，仁多方言では 3.2.5 で触れた jori「百合」など r が後続する場合を除き，語頭（ebi「指」）では e に，母音の後（kai「粥」）や単独の場合（i「湯」）は i に対応する（表 17）。

表 17　古代語 ju（ユ）に対応する音節を含む仁多方言の語例

古代語	仁多	例（仁多方言の形式の簡易音声表示）
ju（ユ）	jo	jorɨ ~ joo「百合」，jore-「揺れる」，joru-「緩い」
	i	kai「粥」，ɕooi「醤油」，tsɨi「露」，i「湯」
	e	eka「床」，ekɨ「雪」，edzɨ「柚子」，eme「夢」

表 17 からは，古代語 ju（ユ）に対応する音節は，jorɨ ~ joo「百合」のように直

[27] 声門摩擦音 h の後に母音が続く場合，通常は声門より上の調音器官は当該母音を調音する構えをとる。しかし，その母音が i などの狭母音である場合，その狭めによって口腔内に摩擦が生じると，結果として声門音とならない。これを避け，h の声門での調音を保つために口腔の狭めが広くなり，i が e となるとが考えているが，詳細は今後の課題としたい。

後にrがあるという条件で，(8)の後舌母音の低下 *u > o によって jo に変化し(3.2.5)，その後，この変化に取り残された *juka「床」などの *ju が以下の（16）の音変化によって *i になった（*juka > *ika）と考えられる。

（16）　*ju > i（半母音 j への後舌狭母音 *u の**融合同化**）[28]

さらに，（10）の**前舌母音の低下** *i > e によって語頭の *i が e へと変化した（*ika > *eka）。つまり，（16）*ju > i は（8）の後舌母音の低下 *u > o よりも後に起こり，（10）の前舌母音の低下 *i > e より前に起こったと考えられる。例えば*juka「床」は，*juri「百合」が（8）の後舌母音の低下の影響で *juri > jori へと変化を起こした後に，*juka > *ika > eka のような変化を経て現代の語形 eka に至ったのである。

3.4. r の隠在化と r の隠在化に伴う特殊音韻変化

3.4.1. r の隠在化と r の隠在化に伴う特殊音韻変化の過程

友定（2008: 6）が「r の隠在」と呼ぶ交替現象（表 2）は，表 18 に示すように，tonari「隣」のような r を含む形式が tonaa「隣」のような r を含まない形式に変化するという通時的変化の反映だと言える。ここでは，この変化を「**r の隠在化**」と呼ぶ。また，r の隠在化の中でも，仁多方言で特徴的な表 18 中の c–f の変化を，廣戸（1950: 40–42）に倣って r の隠在化に伴う「**特殊音韻変化**」と呼ぶことにする[29]。

（17）に，筆者の考える「r の隠在化および r の隠在化に伴う特殊音韻変化の過程」を示す。

---

[28] 半母音 j への狭母音 u の融合同化（*ju > i）は，前に子音を伴う場合にも起こった。この変化は，Cju > Ci という拗音の「直音化」として知られる現象である（*tɕuuhan > tsɨɨhan「昼飯」，*gjuunjuu > gɨɨnɨɨ「牛乳」など）。

[29] 廣戸（1950: 40）はこの現象を「仁多郡に於ける特殊音いん変化」と呼び，現在の奥出雲町にあたる仁多郡ほぼ全域の方言で見られることを示唆している。しかし，筆者の調査では，奥出雲町を旧仁多町域と旧横田町域に分けたうちの旧横田町域では，小馬木地区の方言でのみ確認され，他の方言では少なくとも組織的には確認されていない。

表 18　仁多方言における r の隠在化

		C の条件	例
a	(C)ar{i/u} > (C)aa	C は任意の子音	*tonari > tonaa「隣」 *saru > saa「猿」
b	(C)or{i/u} > (C)oo	C は任意の子音	*torikago > tookago「鳥籠」 *oru > oo「居る」
c	(C)ir{i/u} > (C)jaa	C は b, m, n, k, g	*nobiru > nobjaa「伸びる」 *kiri, kiru > kjaa「霧」「着る」
d	Cir{i/u} > Caa	C は ts, dz, s	*tsɨri, tsɨru > tsaa「釣り」「釣る／鶴／散る」 *madzɨru > madzaa「混じる」 *kedzɨru > kedzaa「削る」 *sɨri, sɨru > saa「尻」「汁／知る／する」
e	Cur{i/u} > Cwaa	C は k, g, h	*kuri, kuru ~ kwaa「栗」「来る」 *meguri > megwaa「擂粉木」 *ɸuru > ɸaa「降る／干く（干る）」[30]
f	(C)er{i/u} > (C)jae	C は任意の子音 （z, h の例は未確認）	*eri > jae「襟」 *neru > njae「寝る」 *suteru > sɨtjae「捨てる」 *kaseru > kasjae「貸す」 *akeru > akjae「開ける」

（17）　r の隠在化および r の隠在化に伴う特殊音韻変化の過程 [31]

a. そり舌音 ɽ ~ ɭ とその後ろの狭母音が**一体化**して「成節的な ɽ ~ ɭ̩」に変化する [32]

b. 「成節的な ɽ ~ ɭ̩」が r **音化**（あるいはそり舌化）した母音 ɚ (~ ə̹) に変化する

c. r 音化（あるいはそり舌化）した母音 ɚ (~ ə̹) の前にある母音 *i, *e, *u が**半母音（渡り音）化**して j（< *i, *e）あるいは w（< *u）となる [33]。この際，音声的には，j（< *i, *e）は前の子音を**口蓋化**し，w（< *u）は前の子音を**唇音化**する

d. c に伴い，ɚ (~ ə̹) が代償延長によって**長母音化**する

---

[30] *ɸuru > ɸaa の場合，ɸ が既に両唇音であり，厳密に言えば唇音化が起こるわけではないので，当該子音が *ts, *dz, *s の場合と同じく表 18 の d に入れるべきかもしれない。しかし，ここでは，変化の結果として当該子音が唇音性を持つことを重視し，e に分類した。

[31] ここで想定した変化は，Shen（2020: 358）が明代から現代にかけての中国語で起こったとする音変化 ɹ̩i > ɹ̩ɨ > ɨɹ̩ > ər(ɚ/ɐɚ) に着想を得たものである。頻繁に起こるような変化ではないと考えられるが，音声学的にはあり得る変化だろう。

[32]（17a）の「そり舌音 ɽ ~ ɭ とその後ろの狭母音が一体化して「成節的な ɽ ~ ɭ（共鳴音）」に変化する」という変化は，Crowley（1997: 35–36）や Trask（2000: 357）の言う unpacking（Trask は serialization / linealizatioin とも）の途中段階に想定される，隣接する分節音が「渾然一体となった（パックされた）音のかたまり」（上野 2014: 16）になる過程として想定している。unpacking では，この後に，その「音のかたまり」が解きほぐされる段階が想定されるが，ここではそのかたまりのままに脱 r 音化（あるいは脱そり舌音化）したとみる。

[33] ここで e が半母音化するのは，出雲方言の e が共通語の /e/ よりも口の開きが狭く，前の子音を強く口蓋化させる音声的な特徴を持つことが関係すると考えられる。

e. 母音 ɚ (~ ə̯) が**脱 r 音化**（あるいは脱そり舌化）し，音韻的に安定した広母音 a となる

また，表 19 は，（17a–e）で示した一連の変化について，表 18 の d 以外のそれぞれの場合における変化の過程を，C が k である場合を例にして示したものである。

表 19　r の隠在化および r の隠在化に伴う特殊音韻変化の過程（C が k である場合）

			(17a)		(17b)		(17c, d)		(17e)
a	*kaɽu, *kaɽi	>	*kaɽ	>	*kaɚ ~ kaə̯	=	*kaɚ ~ kaə̯	>	kaa
b	*koɽu, *koɽi	>	*koɽ	>	*koɚ ~ koə̯	=	*koɚ ~ koə̯	>	koo
c	*kiɽu, *kiɽi	>	*kiɽ	>	*kiɚ ~ kiə̯	>	*kjɚ: ~ kjə̯:	>	kja:
e	*kuɽu, *kuɽi	>	*kuɽ	>	*kuɚ ~ kuə̯	>	*kwɚ: ~ kwə̯:	>	kwa:
f	*keɽu, *keɽi	>	*keɽ	>	*keɚ ~ keə̯	>	*kjaɛ ~ kjaɛ̯[34]	>	kjae

なお，2 節で述べた通り「r の隠在」は r の前の母音が短母音の場合のみに見られ，r の前の母音が長母音や二重母音の場合には観察されない（kooru「凍る」，kiiri「きゅうり」，hairu「入る」）。このことから，r の隠在化とそれに伴う特殊音韻変化は，r の前が長母音や二重母音である場合には起こらなかったと考えられる。それは，そうした環境で r の隠在化とそれに伴う特殊音韻変化が起こることで †kooo，†kiii，†haii のように 3 モーラの母音連続が生じるのを回避するためだと考えられる。

3.4.2. r の隠在化と中舌母音化 *u, *i > ɨ の関係

表 18 の中で注目したいのは d の場合である。例えば，表 18 に挙げた *suru「する」の *su と *siru「知る／汁」の *si とは，（3）の中舌母音化 *u, *i > ɨ の結果として合流し，現代仁多方言ではどちらも sɨ(ru) である。そして，それらが r の隠在化を経て生じた形式もまた，両者ともに saa で，区別されていない。同様に，*tsiru「散る」と *tsuru「鶴」は tsɨru ~ tsaa，*(ma)dziru「混じる」と *(ke)dzuru「削る」の第 2 音節以降は両者とも dzɨr{u/ɨ} ~ dzaa となっており，やはり元あったはずの区別が失われている。つまり，*tsir{u/i} と *tsur{u/i}，*dzir{u/i} と *dzur{u/i}，*sir{u/i} と *sur{u/i} は，現代仁多方言で r の隠在が生じているか否かにかかわらず，区別がない。これらの事実は，（3）の歯茎破擦音・摩擦音の後での中舌母音化 *u, *i > ɨ によって，*tsir{u/i} と *tsur{u/i}，*dzir{u/i} と *dzur{u/i}，*sir{u/i} と *sur{u/i}，それぞれの区別がなくなった後に，（17a–e）で示した r の隠在化に伴う特殊音韻変化が起こったとすることで説明可能である。また，（17c）で示したように r の前の *i はその前の子音を口蓋化させる半母音 j となると考えられるが，ts, dz, s の後の場合には *i の前にあ

[34] *kiru と *keru に遡り，また，それらと交代する kjaa「着る」と kjae「蹴る」とが対立することから，この段階で半母音化した *keru に含まれる *e は，*i とは異なる形で後続母音の音質に影響を与えたと想定する。ここではそれを *kjaɛ ~ kjaɛ̯ という形で示した。

るそれらの子音が口蓋化を起こさない（tsaa「散る」，madzaa「混じる」，saa「汁」など）。これは，ts, dz, s の後の *i がこの時点で既に中舌母音 ɨ に変化していたために半母音 j とはならず，前の子音を口蓋化させることがなかったためだと考えられる。この場合，中舌母音 ɨ は半母音化する代わりに，弱化，脱落したと考える（表 20 の 17c'）。表 18 の d の場合での r の隠在化に伴う特殊音韻変化の過程を，それに先んじて起こった（3）の中舌母音化と合わせ，表 20 にまとめた。

表 20　（3）の中舌母音化と r の隠在化に伴う特殊音韻変化の過程（例）

		（3）中舌母音化		（17a）		（17b）		（17c'）ɨ の脱落		（17e）脱 r 音化
*tsiɽu「散る」	>	*tsɨɽɨ	>	*tsɨɽ	>	*tsɨə̯ ~ tsɨə̯̯	>	*tsə̯ː ~ tsə̯̯	>	tsaː
*tsuɽu「釣る」	>	*tsɨɽɨ	>	*tsɨɽ	>	*tsɨə̯ ~ tsɨə̯̯	>	*tsə̯ː ~ tsə̯̯	>	tsaː

一方，表 18 の c，つまり，r の前の音節が bi, mi, ni, ki, gi である場合に，nobjaa「伸びる」や kjaa「霧 / 着る」などのように r の隠在形の頭子音が口蓋化しているのは，そこに含まれる母音 *i が中舌母音化していなかったためである。3.2.3 で述べたように b, m, n の後の母音 *i の一部も中舌母音化する場合があったが，中舌母音化が顕著であったのは，abɨra「油」，mɨgara「身体」，*nɨwa（> newa）「庭」などのように，後続音節に a が含まれる場合であった（＝（5））。それに対し，表 18 の r の隠在化とそれに伴う特殊音韻変化が起こったのは r の後ろの母音が *u か *i の場合である。そのような環境では b, m, n の後の母音 *i は中舌母音化せず，前舌性を保っていた。そのため，（17c）で半母音 j へと変化し，前の子音を口蓋化させたのだと考えられる。表 21 に *mi の場合を例にとって，その変化の過程を示すが，音対応からすれば，*bi, *mi のみならず *ki, *gi の場合でも同様の変化が起こったものと考えられる。

表 21　（5）の中舌母音化と r の隠在化に伴う特殊音韻変化の過程（*mi の場合）

		（5）*mi > mɨ / _Ca		（17a, b）		（17c, d）子音の口蓋化		（17e）脱 r 音化
*miɽu「見る」	>	*miɽu	>	*miə̯ ~ miə̯̯	>	* mjə̯ː ~ mjə̯̯	>	mjaː
*migara「身体」	>	*mɨgara	=	*mɨgara	=	*mɨgara	=	mɨgara

表 21 で，(5) の中舌母音化を (17) の一連の変化よりも前に起こったとするのは，3.4.3 で述べるように，（17）に示した r の隠在化とそれに伴う一連の音韻変化が，（6–8）の後舌母音の低下 *u > o よりも後に起こったと考えられる一方，3.2 で示したように（5）の中舌母音化は（6）の後舌母音の低下よりも前に起こったと考えられるためである。

3.4.3. r の隠在化と母音の低下 u > o, i > e の関係

既述のとおり，**r の隠在化（とそれに伴う特殊音韻変化）**は，（6–8）の後舌母音の低下 *u > o よりも後に起こった一方，（10, 11）の前舌母音の低下 *i > e よりは前

に起こったと考えられる。

まず，r の隠在化が後舌母音の低下 *u > o よりも後に起こったと考えられる根拠となるのが，joo ~ jorɨ「百合」である。3.3.2 で述べたように，古代語との対応から，仁多方言の joo ~ jorɨ「百合」という形式は *juri に遡ると考えられる。この *juri という形式が，j と r の間という条件下で後舌母音の低下 *u > o により *jori となり，その後 r の隠在化によって joo という交替形を得るに至ったと考えれば，joo ~ jorɨ「百合」の母音が o であることの説明が可能である。これに対して，仮に「r の隠在化」のほうが *u > o より先に起こったとすれば，「r の隠在化」によって *juri > †jwaa あるいは†jaa のような形になり（表 2 の kurɨ ~ kwaa「栗」などを参照），後舌母音の低下 *u > o の影響をうけなかったはずである。

次に，r の隠在化が前舌母音の低下 *i > e よりも前に起こったことは，現代仁多方言で，iru ~ jaa「炒る」と eri ~ jae「襟」，nɨru ~ njaa「煮る」と neru ~ njae「寝る」とが，それぞれ対立しているという事実から示唆される。3.3 で述べたとおり，仁多方言では，語頭や n の後では無条件に前舌母音の低下 *i > e が起こり（＝（10），（12）），原則として語頭や n の後の *i は全て e となっている。しかし，例外的に ir-u「炒る」と nɨ-ru「煮る」の第 1 音節には i ~ ɨ が保たれており，また，それらの交替形である jaa，njaa は，eri「襟」の交替形 jae，neru「寝る」の交替形 njae とそれぞれ対立している。このことは，表 22 に示すように，*iru と *eri あるいは *niru と *neru の語頭音節に含まれる母音 *i と *e の対立があった段階で，r の隠在化が起こったとすることで説明される。もし，前舌母音の低下 *i > e が r の隠在化よりも前に起こったのならば，例えば「炒る」は *iru > *eru > † jae のように変化し，*eri「襟」に由来する jae と区別されなくなっているはずである。

表 22　r の隠在化と前舌母音の低下 *i > e（*iru と *eri の場合）

		（17）r の隠在化		（10）*i > e / #_
*iru「炒る」	>	jaa	=	jaa
*eri「襟」	>	jae	=	jae
*ine「稲」	=	ine	>	ene

ちなみに，現在までに仁多方言の中で nɨ という音節を持つことが確認されたのは，nɨru「煮る」，nɨta「煮た」など動詞 nɨ-「煮る」の活用形のみである（地名の「仁多」は neta）。非過去・終止連体形の nɨru だけでなく，nɨta「煮た」などの他の活用形でも nɨ が現れるのは，共時的な基底形として，「煮る」の非過去・終止連体形を nɨru /niru/ とできることを背景に，動詞活用のパラダイムの中で，動詞 nɨ-「煮る」の語幹末母音 ɨ /i/ が保持されたためと見ることができる。「炒る」の場合も同様の説明が可能である。

3.5. 小結：仁多方言における母音をめぐる音変化についてのまとめ

（18）に，ここまでの議論で推定された**母音をめぐる音変化**と関連する音変化を再掲する。なお，（18a–h）の音変化は，この順番で起こったと考えられる。

（18）　仁多方言に起こった母音をめぐる音変化のまとめ

a. *u, *i > ɨ **（中舌母音化）**
   i. *u, *i > ɨ / {ts, dz, s} _（歯茎破擦音・摩擦音の後の中舌母音化，（3））
   ii. *u, *i > ɨ / {m, n, b}_Ca（鼻音・有声両唇破裂音の後の中舌母音化，（5））
   iii. *u, *i > ɨ / ɸ_（両唇摩擦音の後での中舌母音化，（13））
b. *ɨ ~ *u > i / ɸ_Ci（中舌母音が後ろの前舌母音 i の影響で前舌母音に安定，（14））
c. *u > o **（後舌母音の低下）**
   i. *u > o / m, n_（鼻音の後での後舌母音の低下，（6））
   ii. *u > o / #_（語頭の後舌母音の低下，（7））
   iii. *u > o / #j_r（j の後の後舌母音の低下，（8））
d. (C)ar{i,u}, (C)or{i,u} > (C)aa, (C)oo（**r の隠在化**，（17a–e））
   Cir{i,u}, Cur{i,u},(C)e{i,u} > C(j)aa, C(w)aa, (C)jae（**特殊音韻変化**，（17a–e））
e. *u > o / {a, o}{b, g}_（後舌母音の高さの同化，（9））
f. *ju > i（半母音 j への後舌狭母音 *u の融合同化，（16））
g. *ɸ > h / _{i, e}, *i > e / h_（前舌母音 *i, *e の前での両唇音 *ɸ の声門音化，および，それに伴う前舌狭母音 *i の低下，（15））
h. *i > e（**前舌母音の低下**）
   i. *i > e / #_（語頭における前舌母音の低下，（10））
   ii. *i > e / m_（鼻音 m の後での前舌母音の低下，（11））
   iii. *i ~ *ɨ> e / n_（鼻音 n の後での前舌母音の低下，（12））

また，本節のまとめとして，表 23 に，いくつかの語を取り上げ，それらが（18）にまとめた音変化を経験し，現代の形式に至るまでの過程を，主に（18）で下線を付した 4 つの音変化を軸にして示す。語形の下には，（18）にまとめた変化のうち，その前段階から変化するのに被った変化の記号を付してある。前段階から変化していない場合には「変化なし」とした。

表 23　仁多方言に起こった母音をめぐる音変化（例）

	（18a）*u, *i > ɨ 中舌母音化	（18c）*u > o 後舌母音の低下	（18d）r の隠在化	（18h）*i > e 前舌母音の低下
*surimi 「すり身」	*sɨrimɨ （18a-i）	*sɨrimi （変化なし）	*saami （18d）	*saami* [saːmɨ] （変化なし）
*siru 「汁」	*sɨru （18a-i）	*sɨru （変化なし）	*saa （18d）	*saa* （変化なし）
*mukade 「百足」	*mɨkade （18a-ii）	*mɨkade （変化なし）	*mɨkade （変化なし）	*mikade* [mɨkade] （変化なし）
*mukudori 「椋鳥」	*mukudori （変化なし）	*mokudori （18c-i）	*mokudoo （18d）	*mokudoo* （変化なし）
*migara 「身体」	*mɨgara （18a-ii）	*mɨgara （変化なし）	*mɨgara （変化なし）	*migara* [mɨgara] （変化なし）
*migi 「右」	*migi （変化なし）	*migi （変化なし）	*migi （変化なし）	*megi* （18h-ii）
*nusi 「主」	*nusɨ （18a-i）	*nosɨ （18c-i）	*nosi （変化なし）	*nosi* [nosɨ] （変化なし）
*nuka 「糠」	*nɨka （18a-ii）	*nɨka （変化なし）	*nika[*nɨka] （変化なし）	*neka* （18h-iii）
*nisi 「西」	*nisɨ （18a-i）	*nisɨ （変化なし）	*nisi[*nɨsɨ][35] （ni > nɨ）	*nesi* [nesɨ] （18h-iii）
*nita 「仁多」	*nɨta （18a-ii）	*nɨta （変化なし）	*nita[*nɨta] （変化なし）	*neta* （18h-iii）
*niru 「煮る」	*niru （変化なし）	*niru （変化なし）	*njaa （18d）	*njaa* （変化なし）
*uri 「瓜」	*uri （変化なし）	*ori （18c-ii）	*oo （18d）	*oo* （変化なし）
*iki 「息」	*iki （変化なし）	*iki （変化なし）	*iki （変化なし）	*eki* （18h-i）
*jubi 「指」	*jubɨ （18a-ii）	*jubɨ （変化なし）	*ibɨ （18f）	*ebi* （18h-i）
*juri 「百合」	*juri （変化なし）	*jori （18c-iii）	*joo （18d）	*joo* （変化なし）
*ɸidza 「膝」	*ɸɨdza （18a-iii）	*ɸɨdza （変化なし）	*ɸɨdza （変化なし）	*huza* [ɸɨdza] （変化なし）
*ɸidzikko 「肘」	*ɸɨdzɨkko （18a-iii）	*ɸidzɨkko （18b）	*ɸidzɨkko （変化なし）	*hezikko* [hedzɨkko] （18g）
*kurubusi 「踝」	*kurubusɨ （18a-i）	*kurubusɨ （変化なし）	*kwaabosɨ （18d > 18e）	*kwaabosi* （変化なし）
*mabuta 「瞼」	*mabɨta （18a-ii）	*mabɨta （変化なし）	*mabɨta （変化なし）	*mabita* [mabɨta] （変化なし）
*uguisu 「鶯」	*uguisɨ （18a-i）	*oguisɨ （18c-ii）	*ogoisɨ （18e）	*ogoisi* [ogoisɨ] （変化なし）

[35] 3.3.1 で述べたように歯茎音 n の後では早く *i と *ɨ の対立が失われたと考えられる。音声的に前舌母音 i と中舌母音 ɨ とで揺れていた可能性もあるが，ここでは ɨ とした。この後，この /ni/[ni ~ nɨ] は全てが前舌母音の低下によって ne になった。注 25，26 も参照。

4. 音対応の例外と仁多方言の史的位置付け

筆者の手元にある現代仁多方言の形式については，基本的に古代語の形式を祖形とし，その祖形が（18）に示した音変化を経験したとすれば説明可能である。しかし，少数ながら例外的なものが存在する。例えば，3.2.1 で指摘したように kusoo「薬」という形式は，仁多方言と古代語の音対応からは例外となる。仮に古代語の kusuri（クスリ）という形式を祖形とし，それが（18a, d）の音変化を経験したとすると *kusuri > *kusɨri > †kusaa となり，現代仁多方言の形式としては観察されない†kusaa という形式が得られることとなる。この方言では，古代語の suri（スリ）に対応する音連続は，日本祖語の *suri から（18a）の中舌母音化 *u, *i > ɨ の影響を受けて sɨri となり，その後，（18d）の「r の隠在化とそれに伴う特殊音韻変化」を経験し，saa となる。実際，surimi「すり身」に対応する現代仁多方言の形式は saamɨ である。

以上の事実を，比較言語学的観点から捉えなおせば，現代仁多方言の kusoo「薬」の soo と saamɨ「すり身」の saa とは，共に古代語の suri（スリ）という音連続に対応しながらも，両者の共通の祖先の段階では異なる祖形に遡るものと想定しなければならないことになる。実際，Pellard（2013: 86）は，「薬」の日本祖語形を琉球諸方言と上代語との対応に基づいて *kusori と再建し，その第 2 音節が *usu「臼」の第 2 音節とは区別されるものであったとする。仁多方言に見られる kusoo「薬」という形式は，この *kusori を祖形とし，3.4.1 で論じた（17）の「r の隠在化とそれに伴う特殊音韻変化」を経験して，*kusori > kusoo のように変化したとすれば説明できる[36]。

ここで重要なのは，この kusoo「薬」という形式の存在によって，仁多方言が，中央方言で起きたと考えられる**狭母音化** *o > u を経験していない蓋然性があることが示唆されることである。また，kusoo「薬」の第 2 音節の母音 o のように，仁多方言の諸形式に見られる「古代語 u に対応する o」の中に，（18）の音変化の結果として生じたと考えられないものがあれば，それは日本祖語の *o を保持しているものである蓋然性が高いと言える。以下では，そうした例を 2 つ挙げ，先行研究なども参考にして，その位置づけについて検討する。

1 つめは仁多方言の sɨrosɨ「印」という語である。この語の第 2 音節の母音 o も，古代語との対応からすると例外的である。古代語の形式 sirusi（シルシ）を祖形とした場合，それが（18a, d）の変化を経験すると，現代仁多方言で†saasɨ（< * sɨrusɨ < *sirusi）という形式となることが予測される。しかし，実際は sɨrosɨ という形式が観察される。また，この場合 ro の前の母音は狭母音の *i であり，同化によって ro となったとも考えられない（注 22 参照）。

Thorpe（1983: 304）は，琉球諸方言における「印」を表す形式を比較し，特に南

[36] *kusuri を祖形とし，狭母音が続く中で第 2 音節の u が異化によって o に転じ，kusori となったという可能性はある。この可能性は後述の sirosi「印」の場合も考えられる。ただ，異化は一般に散発的に起こるもので（Bybee 2015: 69），それを検証することは難しい。

琉球（先島）諸方言の語形を根拠にして，その第 2 音節が *ru には遡り得ず，祖形としては *sirosi が再建されるとした。ただ，Thorpe は，琉球諸方言にある「印」を表す語が借用語である可能性についても指摘しており，琉球祖語形（あるいは，日本祖語形）として *sirosi と再建すべきかについて，少なくとも琉球諸方言からは強い根拠が得られないことを示唆している。そうした中にあって，仁多方言にある sɨrosɨ という形式は，日本祖語の「印」に *sirosi という祖形を再建するための新たな支えとなる。琉球諸方言だけでは，その再建形に強い根拠を与えられなかったものについて，本土方言側からそれを支持する根拠が得られることは，従来あまり認識されていない。その意味で，仁多方言の sɨrosɨ という形式は重要な意味を持つ。

次に取り上げるのは仁多方言の soso「裾」という語である。この語もまた，古代語の suso（スソ）との対応からすると，その第 1 音節の so が例外的な対応を示すものである。古代語と同形式の *suso を祖形とするならば, 第 1 音節の母音が（18a-i）の中舌母音化によって ɨ になり，現代仁多方言では sɨso という形式が観察されるはずである [37]。

筆者の知る限り, この語の琉球諸方言における歴史を扱った先行研究は従来ない。ただ，国立国語研究所（1963: 498）には，沖縄首里方言の形式として /susu/「裾」という形式があがっている。この /susu/ という形式の第 1 音節もまた祖語の *su に遡るものと考えられない。国立国語研究所（1963: 40）によると，首里方言では一般に古代語の su（ス）に対応する音節は，古代語の si（シ）に対応する音節に合流している（首里方言の /sina/「砂」と /sima/「島」とを比較されたい）。この事実から考えると，首里方言の /susu/ の第 1 音節は，むしろ，その第 2 音節と同じく古代語の so（ソ）に対応していると考えられる。つまり，首里方言の形式からは日本祖語形として *soso が再建され，仁多方言の soso はこの *soso という形式を祖形として再建する支えとなるものと捉えられる [38]。

以上, kusoo「薬」を含めて僅か 3 つの形式ではあるが, *o を含む日本祖語形（*kusori, *sirosi, *soso）を再建するための根拠が，仁多方言の中に見出され得ることを指摘した。ここで重要なのは，本節で取り上げた「薬」「印」「裾」について，それら 3 語の *o を含む日本祖語再建形を支える根拠が，仁多方言のみならず，琉球諸方言の側からも得られるということである。そのことはまた，仁多方言で**狭母音化** *o > u が起こらなかったことを裏付けることにもなる。

---

[37] 実際には sɨso という形式も観察されるが，これは共通語形 suso からの類推によって生じた形かと思われる。

[38] この語に関する最大の問題は，日本祖語形が *soso だとして，中央方言でなぜその第 1 音節の母音 *o のみが狭母音化し，第 2 音節の *o が狭母音化を被らなかったのか，ということである。服部（1978–79 [2018: 316, 335]）は，上代語のオ列甲類母音は，日本祖語の *oo, *au, *ua のいずれかに遡るものとするが，この服部の仮説を生かし，例えば *sosoo と再建することも可能である。ただ，祖語の音節構造についてはアクセントなど他に考慮すべき問題がある。今後の課題としたい。なお，早田（1998 [2017]）に関連する議論がある。

5. おわりに

前節で述べたように，仁多方言は中央方言が経験した狭母音化 *o > u を経験していない方言であり，そこに見られる古代語の u に対応する o の一部には，祖語の *o を保持するものが含まれると考えられる。今後，このような観点から，この方言のデータを精査していくことが求められる。その一方で，仁多方言が**狭母音化** *e > i を経験したか否かについては，今あるデータから明確なことを言えないということも，また重要な点である。

服部四郎が，上代語の i に対応する半狭母音 *e を含む可能性があるものとして日本祖語形を再建したものとしては，1 節で取り上げた *meNdu「水」の他に，*pedi「肘」（服部 1978–79 [2018: 314]），*peru「蒜」（服部 1978–79 [2018: 316]），*kezu「傷」（服部 1978–79 [2018: 318]）がある。また，Pellard（2013: 85）の再建による *erə「色」と *neNkər-「濁る」もある。これらのうち，「水」「肘」「色」「濁る」の 4 語については，仁多方言でも medzɨ, hedzɨ, ero, negor- であり，e を含む。しかし，これら 4 語において e が現れている環境は全て仁多方言で前舌母音の低下 *i > e が起こる環境であることに注意しなければならない。すなわち，medzɨ の「m の後で，後続音節に a がない」という環境（18h-ii），hedzɨ の「h の後で，後続音節に i がある」という環境（18g），ero の「語頭」という環境（18h-i），negor- の「n の後」という環境（18h-iii），全てが 3.3.1 で述べた前舌母音の低下 *i > e が起こる環境なのである。それ故，仁多方言の「水」「肘」「色」「濁る」を表す 4 語に含まれる e は，それらが祖語の *e を保持するものなのか，それとも，祖語の *e が狭母音化によって一度 *i に変化した後，この方言で起きた前舌母音の低下 *i > e によって新たに e へと変化したものなのか，判断できない[39]。

1 節で取り上げたように，服部四郎は，日本祖語形 *mendu「水」について論じる中で，「隠岐，島根，鳥取などに mezu, mezi，青森に medzu，津軽に menzi があるから，日本祖語形としては *mendu（中略）を立て，日本祖語から奈良朝中央方言へ *e → i という変化が起こったけれども，周辺諸方言ではそういう変化が少なくとも一次的には起こらなかったとすべきことが明らかとなる」（服部 1976b [2018: 84]，一部改変）とした。しかし，ここで服部があげた方言の中で，少なくとも「島根」の方言の形式である mezu, mezi に含まれる e については，当該方言内部で新し

[39] 残る *peru「蒜」については，仁多方言において対応する語形を得られていない。なお，その他に祖語の *e を保存している可能性があるものとして，memedzo「蚯蚓」がある。ただ，その第 1 音節・第 2 音節の e もまた，仁多方言内部の**前舌母音の低下** *i > e によって新たに生じたものである可能性がある。また，moko「婿」の第 1 音節の o も，祖語の *o を保持したものである可能性がある一方，**後舌母音の低下** *u > o によって新たに生じたものとも考えられる。いずれにしても，注 37 で指摘した siso「裾」の例などからも分かるように，本土方言の場合，周辺方言や共通語からの影響が比較研究の「ノイズ」となり，その先史の再建は容易でない。本稿では，可能な限り例外的な対応を示すものについても説明を試みたが，なお音変化の音声的なメカニズムの詳細を含め問題が残るところが多いにある。諸方面からのご批正を請い願う次第である。

く生じたものである可能性が否定できない。また，隠岐や鳥取，青森や津軽についても同様の可能性を指摘できる。

重要なのは，その語の語形そのものではなくて，音対応とその環境（条件）である。今後は，日本語諸方言の記述研究においても，音対応とその環境を十分に意識した調査・研究が行われることが求められる。例えば，信越国境の秋山郷方言にある moko「婿」という形式については，その第 1 音節の母音 o が古代語の u に対応し，形式自体も Pellard（2013: 85–87）の再建する日本祖語形 *moko と一致する。しかし，馬瀬（1982: 20）によれば，秋山郷方言では m の後で u と o の対立が失われ，全て o で現れるという。実際，平山他（1993: 4994, 5140）によると，古代語の mura（ムラ）「村」に対応する秋山郷方言における語形として mora があるのに対して，moru（モル）「盛る」に対応する語形は moro である。この事実に照らせば，秋山郷方言における moko という形式が，方言内部で *moko > *muko > moko という変化を経て成立した形式であることを否定できない。

また，秋山郷方言を含めた「東国系諸方言」と呼ばれる方言の一部では，その動詞連体形が -o で終わり，その o が祖語の *o を保持するものだとされる。しかし，秋山郷方言の場合には，語頭および n, m, p, b, r の後では u と o の区別がない（馬瀬 同）。そうなると，例えば秋山郷方言の「取る」の連体形 toro について，その語末の o が祖語の *o を保持したものか判断できないことになる。ただ，この場合，Pellard（2008: 140–141）が指摘しているとおり，k や s を語幹末に持つ動詞 kak-「書く」や os-「押す」の連体形が kako・oso であり，終止形 kaku・osu とそれぞれ対立していることが支えとなり，同じく動詞連体形の toro の語末 o も，祖語の *o を保持するものである蓋然性が高いと言うことができるのである。

この動詞連体形の例からも分かるように，秋山郷方言を含めた「東国系諸方言」と呼ばれる一群の方言を中心とする「周辺方言」には，中央方言で狭母音化によって失われた祖語 *o や *e が一部なりとも保持されている可能性がある。従来，それらについて比較言語学的観点から十分に検討したものはなかった。しかし，古代語や他方言との音対応を，その環境を含めて精査しつつ，当該方言内部の音変化を推定していくことで，祖語の形質を受け継ぐ特徴の存在が明らかになる場合がある。本稿では，このことを出雲仁多方言を例にして示した。他の本土諸方言についてもそうした観点から再検討していくことが当該分野の課題である。

参照文献

Bybee, Joan (2015) *Language change*, Cambridge: Cambridge University Press.

Campbell, Lyle (2020) *Historical linguistics: an introduction*, 4th edition, Edinburgh: Edinburgh University Press.

Crowley, Terry (1997) *An introduction to historical linguistics*, 3rd edition, Oxford: Oxford University Press.

服部四郎（1976a）「琉球方言と本土方言」伊波普猷生誕百年記念会『沖縄学の黎明：伊波普猷生誕百年記念誌』7–55．那覇：沖縄文化協会．【服部（2018: 45–81）に所収】

服部四郎（1976b）「日本祖語の母音体系」『朝日新聞』1976 年 6 月 22 日夕刊．【服部（2018:

83–85）に所収】
服部四郎（1978–79）「日本祖語について（1–22）」『月刊言語』1978 年 1–3，6–12 月号，1979 年 1–12 月号，東京：大修館書店．【服部（2018: 87–401）に所収】
服部四郎（2018）『日本祖語の再建』（上野善道補注）東京：岩波書店.
早田輝洋（1998）「上代日本語の音節構造とオ列甲乙の別」『音声研究』2(1): 25–33. 【早田 2017『上代日本語の音韻』（東京：岩波書店）3–18. に所収】
平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫（編）（1993）『現代日本語方言大辞典　第 6 巻』東京：明治書院.
廣戸惇（1950）『山陰方言の研究』島根県立教育研修所.
上代語辞典編集委員会（編）（1967）『時代別国語大辞典　上代編』東京：三省堂.
国立国語研究所（編）（1963）『沖縄語辞典』東京：大蔵省印刷局.
国広哲弥（1963）「島根県方言の発音」廣戸惇・矢富熊一郎（編）『島根県方言辞典』17–33. 島根県方言学会.
馬瀬良雄（1982）「第一章　第二節　秋山郷の方言」馬瀬良雄（編集代表）『信越の秘境　秋山郷のことばと暮らし』12–38. 東京：第一法規出版.
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（2000–2002）『日本国語大辞典　第二版』東京：小学館.
Pellard, Thomas (2008) 'Proto-Japonic *e and *o in Eastern Old Japanese'. *Cahiers de linguistique - Asie orientale* 37(2): 133–158.
Pellard, Thomas (2013) 'Ryukyuan perspectives on the Proto-Japonic vowel system' In: Frellesvig, Bjarke & Sells, Peter (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 20: 81–96, University of Oxford-University of London. Stanford: CSLI Publications.
Shen, Zhongwei (2020) *Phonological history of Chinese*, Cambridge: Cambridge University Press.
Thorpe, Maner L. (1983) *Ryūkyūan language history*. Ph.D. thesis, University of Southern California.
友定賢治（編著）（2008）『日本のことばシリーズ 32　島根県のことば』東京：明治書院.
Trask, Robert L. (2000) *The dictionary of historical and comparative linguistics*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
上野善道（1981）「松江市方言のアクセント：付属語を中心に」『日本海域研究所報告』13: 109–136.
上野善道（1985）「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布（1）」『日本学士院紀要』40(3): 215–250.
上野善道（2014）「フンイキ > フインキの例から音位転換について考える」小野米一・菅泰雄・佐々木冠（編）『生活語の世界：北海道方言研究会 40 周年記念論文集』8–19. 北海道方言研究会.
上野善道（2016）「出雲方言アクセント調査報告」木部暢子編『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 出雲方言調査報告書』23–67.

執筆者連絡先：
南山大学人文学部
e-mail: hirako@nanzan-u.ac.jp

［受領日　2021 年 2 月 22 日
最終原稿受理日　2023 年 3 月 27 日］

Abstract

Historical Study on the Vowels in Izumo-Nita Japanese

Tatsuya Hirako
Nanzan University

Based on the comparison with Old Japanese (OJ), in Izumo-Nita Japanese, which is spoken around the southern part of the Izumo area in Shimane prefecture, three major sound changes are reconstructed: (1) the centralization of high vowels *u, *i > ɨ, (2) the lowering of high vowels *u > o, *i > e, and (3) r-deletion before high vowels. In most cases, forms that appear in OJ are reconstructed as proto forms, from which the forms of Nita could have been derived through the three changes above. From the viewpoint of the sound correspondences between Nita and OJ, however, three forms are considered exceptions: *kusoo* "medicine," *sɨrosɨ* "mark," *soso* "cuff." Referring to previous studies, the mid-high vowels "o" in these forms are thought to be the remnants of *o in proto-Japanese, and they suggest that the mid-vowel raising *o > u, which Hattori (1978–79 [2018]) assumed occurred in OJ, would not have occurred in Nita. In other mainland Japanese dialects, there are what appear to be remnants of *o and *e from proto-Japanese that were lost in the central dialects. Re-examining them from a comparative linguistic perspective is one of the future tasks in this field.